

明治期の模範村、源村の成立とその背景

宇野 俊一

本日、私が「明治期の模範村、源村の成立とその背景」という表題でお話することについては、個人的にも大きな感慨があります。私が千葉大学へ赴任して数年後の昭和四十七年と翌年の二年にわたり、ゼミの学生を連れて初めての現地史料調査を行ったのが、旧源村役場の所蔵文書の調査でした。膨大な役場資料に圧倒されながら目録をとり、マイクロ撮影を続けた暑い夏の日々を思い出します。それはまた、百年まえに日本の三大模範村の一つに選定された源村の文書群の調査に本格的にとりかかっているのだという高ぶった気持ちもあつたと若かった私自身の想い出でもあります。

明治維新によって若年の明治天皇を擁した統一国家が成立しました。江戸時代を通じて京都朝廷の内にとどまっていた天皇は、新しい日本国家の君主として人々の前に姿を現すために、大阪行幸を皮切りに、江戸への行幸を実行するとともに、帝王学を学んで君徳も具えなければならなかったのです。

明治国家は、西欧文明をいち早く導入して近代化をはかるとともに、天皇を頂点とする国家体制を構築する必要がありました。近代天皇制といわれる国家体制は天皇の権力を強め安定化させるためには、国民意識を新しい天皇の下に収斂する必要がある、そのために威厳のある君主像

とともに君徳を具えた帝王であることが要請されました。

「聖明」の君主は、徳治を実践するため、天皇の行幸に際して地域の孝子・貞女を表彰し、実業に献身する者たちを顕彰しました。皇后もまた、全国各地の父母に孝養を尽くし、家業に精励して家を維持した人々の事例を集め、明治十年に『明治孝節録』として刊行しています。

明治天皇は、翌年に東山、北陸、東海地方の巡幸の中で各県の学校を巡視して教育の根本を「仁義忠孝」を基本とすることが重要であるとして明治十二年八月に「教学大旨」という詔勅を出して学校教育の方向を示しました。またこの草案を起草した侍講で儒学者元田永孚に『幼学綱要』の編纂を命じました。ここでは、日本と中国における事例を、孝行・忠節をはじめとし、友愛・信義・誠実・礼讓などの徳目ごとに説話を例示して教育の基本とすることとしました。

こうして天皇ならびに側近によって忠孝を中心とする国民教化の方針は明示されましたが、他方、自由と民権の思想と国会開設を要求する運動が全国に広がり、欧化主義の風潮はとどめ難いものになっていました。ここに、明治政府も立憲制への転換を迫られ、明治二十二年に発布された明治憲法は欽定憲法として天皇の大権を広く規定しますが、議会も開設され、基本的人権についても明示されました。

そして、翌年には教育勅語が發布されます。これは立憲国家への転換とともに、教育を基礎として国民道徳の基本をたてる必要があると考えて、天皇の勅語という形で出されたものです。

要するに明治初年以来的のいわば儒教道徳的なものを、国民教化の基本として国民道徳の基礎に据えようとした考えがある一方で、やっぱりそれでは近代国家の国民道徳としては不十分であるという考え方があり、

それらが統合されて明治二十三年十月に発布された教育勅語になったといえましょう。

この教育勅語というのは、明治憲法がその前の年に出されているわけですから、国民をきっちりした大日本帝国の臣民として位置づけられる、教育の基本原理を作らなければならないということです。これは文部省が推進したのではなくて、全国の府県知事の会議の中から出てきたものです。全国各地に自由民権運動がどんどん広がって、小学校や中学の先生たちも西洋かぶれが多く、学校教育では日本の智者忠臣ではなく、欧米の英雄、豪傑を理想とする風潮がみなぎって、君臣の義や儒教的な道徳などは全く価値のないものになっていると指摘された。当時、日本語表記はやめてローマ字にしたほうがいいということ言う人も識者の中にはいたわけです。それで、地方の知事たちはとてもこのまま放っておけないということで、何か天皇の勅語のようなもので收拾する必要があるとして、急ぎよこの教育勅語は作られ始めたのです。最初、中村正直という西洋哲学も学んだ人が作ったのですが、それは哲学的な理屈や宗教上論議を呼ぶ表現などがあって、勅語としては不適當であるとされ、つぎに元田永孚が草案を作りました。ところがこれがまた儒教的な理念とその説明が全面に出ていてこれもやっぱり不十分だということで、内閣法制局長官の井上毅が起草することになりました。

井上毅は、明治憲法を作った中心人物の一人でもあります。彼は熊本出身で漢文が非常にできるんです。格調の高い文章を書けるということで、大久保利通が清国との間で台湾問題が複雑になったときに、自分自らが北京へ行って外交交渉をするときに井上を連れて行ったのです。大久保利通が井上の力量を認めて連れて行ったわけです。ヨーロッパにも

早々として行って、とくにドイツで勉強した人間であります。明治憲法を作るときにも伊藤博文はこの井上毅と金子堅太郎、伊東巳代治と四人だけで明治憲法の草案を作ったんですね。その憲法の一番肝心なところは井上が作っております。だから、井上は明治憲法の生みの親と聞いていでしょう。そういう人物ですが、この教育勅語を作るときも井上は元田永孚の勅語の草案を修正して教育勅語はできたのです。前半では君に忠に、父母に孝に、兄弟に友に、夫婦相和し、朋友相信じというふうには、これは儒教の徳目です。ここでは儒教の徳目は生かしたのですが、元田永孚のように忠とは、孝とはと解釈をつけることは退けて天皇の言葉に特定の解釈をつけるということは不可とし、天皇の言葉というのは、絶対的なもので、それに解釈をつけて一定の読み方しかないということになるので簡明な徳目を羅列することにしたのです。解釈は排除して、君に忠に、父母に孝に、兄弟に友に、それから、井上がはつきりと付け加えたのは「常ニ国憲ヲ重ンジ国法ニ遵イ」、憲法と法律を守るとして立憲体制と法治国家という枠組を明示しました。さらに、一旦緩急あれば、国家に大変なことがあつた場合には、義勇公に奉じると、公ニ国のために尽くせということを付け加えたのです。要するに、憲法ができていたので憲法を守り、国家、公共社会のために尽くすことを付け加えたのです。

そういう意味からしますと、この教育勅語の出現というのは、やはり明治期の立憲制にともなう新しい方向性と古い時代から受け継いでいる儒教的徳目とを、どういうふうに融合させなきゃならないのかということを示しているわけです。

ところが、藩閥政治家の中には日清戦争後になっても依然として保守

的な人もいたわけです。その代表が、第二次松方正義内閣の内務大臣、樺山資紀で薩摩の出身です。彼は全国の藍綬褒章とか紅綬褒章とか、それから緑綬褒章とかを受けた人たちの事歴を調査させたのです。『明治国民鑑』がそれで内務省から出したんです。これは樺山らの発想が日清戦争後になっても近代日本の国民統合というものを考える上において、天皇に表彰された明治初年以來の忠孝中心の国民を模範とする発想でしかなかったということでした。

このころ、内務省が本格的にやり出していたのは各町村の実態調査を始める、ということでした。この明治三十年ごろから町村がどんなことをやっているか、その地方の風俗なんかも含めて全国的な調査をしていきます。これは結局は、内務省としては日清戦争が終わって、日本の地方社会というものをどんなものにするのかということ、今までのような儒教的な道徳を基礎に国民教化をはかるという方法だけでは間に合わない、現実の地方社会を早く安定し充実する必要がある、何よりも町や村の実情を調査しなければならないということでした。

それと同時に、当時内務省の府県課長をしておりました井上友一というのをヨーロッパに派遣します。そして、彼がその結果を報告したのが明治三十四年に出しました『列国の形成と民政』という本で、フランスをはじめとしてドイツ、イギリスとヨーロッパの主要国を調査して、そしてその国々の状態を的確に記述しています。とくに彼は府県課長ですから、各国の地方の状態がどうなっているかということに非常に注目して調査をしています。すなわち、強国の基礎は、健全な町や村にあることを認識したのです。

今日、お配りしたものに「千葉県山武郡源村村治績」というもの

がありますね。これが明治三十六年の八月二十七日の官報に載せられたものです。のちに源村とともに三模範村の一つとなった宮城県名取郡生田村は明治三十六年四月に村是が紹介され、次いで源村は同年八月、静岡県賀茂郡稲取村は同年十月にそれぞれ官報に載りました。ところが、その生田村については明治三十三年二月から村是の調査に着手し、翌三十四年三月にこれを完了して、そして同三十六年三月に始まった第五回の内国勸業博覧会にその村是を出品しています。だから生田村の場合は早々とその村是を作っていたわけでした。

内国勸業博覧会というのは、明治十年代から内務省が最初は上野で第一回を開き、全国からその地域の特産品を出したり、工場からの新製品を出品し、国内の産業奨励のため博覧会は何度も行われました。これがあある意味での日本の資本主義の発展や産業の近代化を促進する場合に非常に役立つわけです。特に東京や大阪から出される新しい機械だとか、各地の特産品や経営方法などが人々の刺激になったわけでした。

生田村の場合、第五回内国勸業博覧会に村是も出品したとあります。

●千葉県山武郡源村村治績

(三十六年八月二十七日官報)

山武郡源村ハ戸數三百餘ノ小村ナレトモ村積風ニ學ヲ以テ縣下ノ模範ト爲スニ足ルモナリ是レ前村長並木和ニ學ケテ本年三月マテ就職セリ其間九年能ク職務ニ勤勉從事シ現村長山本八三(前助役)亦其意志ニ繼キ著々治績ヲ擧ケテ、アリ
役内事務 概簿文書ハ能ク整理シ文書ハ皆別編纂シ十數年間ノモノモ紛雜スルコトナク殊ニ納稅事務ノ如キモ亦能ク整理シ納稅者學生シタルコトナク議員及吏員ノ選舉事務モ黨争ノ弊ナク常ニ靜穩ニシテ整備セリ
教育 頗ル完備シ學齡兒童ハ男百二十五人、女百二人アリ男ハ全部女ハ八十八人(幼稚ノ分ハ皆皆女子ナシ)就學セリ學校ハ尋常、高等ノ併置ニシテ教員四人アリ皆正教員ナリ校舍ハ明治二十八年有志ノ善信金ヲ以テ建築シ又學校基本財産トシテ現金一萬九千九百圓餘ヲ有シ其收入ハ以テ村教員費ノ全部ヲ償フニ足リ爲ニ高等科ニモ授業料ヲ徴收セス又近來學校局周ノ土地ヲ購入シ杉苗ヲ植付テ基本財産ト爲セリ

千葉県山武郡源村村治績 (明治38年8月27日官報) 部分

だから早くからできていたのです。官報に載った生出村の村是はどんなものかといいますと、三十ページにもわたる、実に詳細な村是をつくっています。その内容は、村の政治ばかりじゃなくて、どんな産業があつて、そしてどういうふうにやっているかという詳しいものになつていゝ。ところが、この源村はたった二ページにも足りないものです。そしてもう一つ静岡県の稲取村のほうは生出村よりもっとすごいっていいいぐらゐの村是が出ています。

そうすると、なんで源村がたった二ページ足らずでその模範村になつたのかと、そして実際には、その官報を見ますと源村よりもずっと村是として立派なものを出している村があるんですね。例えば、長野県南佐久郡大沢村は二十ページぐらゐの治績をまとめています。だから、本当は大沢村なんか三模範村のうちに入つていいわけです。源村が模範村になつたというのは、内相の児玉源太郎が明治三十六年八月二十一日吉原三郎地方局長、水野錬太郎参事官、坂中助秘書官、野尻精一文部省視学官などを従えて千葉県に出張し、そして当時の県知事も書記官を随行し、源村と飯岡村を視察したことが大きいと思います。明治時代に有力大臣が地方の村を直接視察したことは大変な出来事でした。

児玉源太郎は陸軍の名だたる将軍で後の日露戦争には大山巖が総司令官で児玉源太郎が総参謀長として出征します。私の考えでは、日露戦争が陸戦でなんとか負けなかつたのはこの児玉が総参謀長でいたからだといふふうな思つております。彼がいなかつたらとてもあの戦争は勝てる戦争にはならなかつたと考えます。大山は薩摩の出身ですが本格的な戦争指導では能力があるとは思われぬ。鷹揚な人ですから、まあお前に任すといふふうなことで、実際の指揮は児玉が執つたのです。その有名

な話は第三軍司令官の乃木希典が旅順攻略のときに非常に手を焼いていたのです。児玉は総司令部のあつた奉天（現在瀋陽）の南方から列車に乗つて二人ぐらゐの部下を連れて旅順まで乗り込み、一時乃木希典の指揮権を中止して、児玉が指揮を執り、二百三高地の占領にまでこぎつけるというエピソードがありますが、これに見られるように、児玉源太郎というのは行動派なんです。

ちよつと源村に来たころは日露戦争の直前なものだから桂太郎内閣は相当大々的な行政財政の整理をやらなければならぬということになつていました。桂首相は、各省大臣の抵抗を排して大改革を実行するには、陸軍の後輩であるが政治力のある児玉にぜひ入閣してもらつて実行したいと言つたので、児玉は台湾総督ですが、その台湾総督と兼任の内務大臣として七月に就任したのです。

彼は今まで陸軍大臣を経験し、台湾総督ということですから、内務行政なんていうのは経験がないでしょう。当時、内務省の地方局長は吉原三郎で、吉原は千葉県の出身です。明治三十六年六月七日には、千葉県会議場で開かれていた関東連合教育界にのぞみ、吉原は地方制度と教育との関係について考えを述べたんです。遺憾ながらわが千葉県には世間に向かつて誇るようなことがなくて困りますといふことをしゃべつていふことからも、源村を特に注目すべき事例とは考えていなかつたと思ひます。

そこへ七月に児玉源太郎が内務大臣に就任する。吉原三郎としては、全国の地方行政はどういうことをやっているかといふことを報告したと思ふんです。だから、町村是を今集めて、百三十、百四十ぐらゐの事例が集まつていることを報告したでしょう。こういうものの中から模範

的な事例をピックアップして、そして全国にそういう施策を広めるようにしたいということを吉原は言ったと思うんです。それをさらに説明を加えたのは府県課長の井上だと思えます。井上は地方行政のベテランですから、彼が補足して説明し、その中できつと宮城県の出村の話だとか、それから静岡県の新取村の話が出たと思うんです。兎玉が千葉県にはないのかと聞いたと思います。なぜかというところ、兎玉源太郎は明治十年代に千葉の佐倉連隊長として数年いたんです。そしてその前に、中尉の時代にも大隊長として、佐倉にいたことがあるらしいんですね。だから、兎玉が源村に視察に来た大きな理由はやっぱり千葉県というのとは、彼にとっては縁故のある懐かしい土地であったからだと思います。しかも、彼は行動派ですから、大臣になって机に座ってふんぞり返っているというんじゃないで、それじゃあ千葉にも模範になるような村はないかと聞き、千葉県から内務省に報告されていたのはこの源村だと思うのです。それじゃあそこへ行ってみようと言ってきたのがこの八月の二十一日でした。源村が官報に出たのが八月二十七日です。ですからこの八月二十七日に官報に源村を出したというのは、兎玉が源村へ来ることになったため、源村をほかの町村の掲載を押さえて、飛び入りさせたんだと思うんです。

そういうことで、ここに源村っていうのは突如としてクローズアップされたということなんです。村治の内容としては大げさなことは書いておりません。並木和二郎の尽力が大きかったと、彼は明治二十四年三月に助役になり、そして後に村長になって大きな役割を果たしたということです。この並木和二郎という人が助役ですつといて、村の状態が大変なのを我慢して、歴代の村長を助けて、彼はずつと一貫して助役を務め

ておりました。「源村治績」には、源村は党弊なく、すなわち党争、党派間の争いはなく、常に静穏にして整備せりとあります。これは明治三十六年の段階ではそうですが、二十年代は大変な状態だったんです。それこそ村の中が真っ二つに割れて、東金クラブというのと自由クラブという二つがあつて、それぞれに大ボスがついて、選挙になるともう大変な選挙をやったんですね。

だから党争がなくなったというのは実は二つの契機がありました。すなわち明治二十八年に学校を建設するということが決まり、建設を始めたときにその村の大ボスたちもこの村の教育という大事な事業で自分たちが争いをしていたのでは駄目だということで対立を解消したのです。村の奇特有力者が大金を出したということもありますが、彼らもそれに引けを取ってはならないということで、それぞれ金を寄付するということがあつて、それで村の人もつぎつぎと寄附し金を出したということで、建設費が集まって立派な校舎ができたのです。

それからもう一つは日清戦争です。日清戦争で、国を挙げての戦争で、村からも出征兵を出しているという中で、村で争いをしているという場合ではないと、この両者がそれぞれ反省をして明治二十九年に新築成った源村の小学校の校庭で、それぞれグループの盟約書を持ってきて、それを校庭で焼いてシャンシャンと手打ちをしたということです。それ以後、この村は争いがなく選挙というときには村中で集まって話し合い、一人の候補者にしぼって選挙をするというふうになったというわけです。

当時、日本の村々ではいろんな争いや対立がありました。それはなぜかというところ、明治二十一年の四月に市制・町村制が制定されました。そ

の町村制っていうのは、それまでの町や村というのは江戸時代の町や村を中心にしてつくられていたのです。だから、今で言えば大字が村だったのですね。ところがその小さな村ではとても、国や府県の税金を徴収したり、徴兵や国が委任する事務を担当したり、村の道路やあるいは川の修築などの土木的な事業、さらに教育の費用を負担することはできないということなんです。当時、町村では教育費が財政の中で大きな比重を占めていました。先生に給料を払わなければならないのと、学校を建築し、その修理など維持・管理をしなければならぬ。教育費というのはどの村でも支出の大体三十五%ぐらい占めるわけです。村長とか助役はほぼ名誉職で給料は要らないんですが、書記などその下にいる人たちには給料を出さなければなりませんから、その費用が必要です。そこで小さな村々を合併したのがこの明治の町村制なんです。だから今まで、全国で七万四千ぐらい村があったんですが、それを一挙に一万三千ぐらいに統合した大合併を実行したのです。

この町村合併は、江戸時代の二百何十年もの間小さな村の共同体で生活していたのが、今度は五つから六つの村が一緒になるわけですから、それぞれの村の行事とかあるいは風習とか、あるいは付き合い関係というのが変わってくるわけですね。この町村合併ではさまざまな問題がおこったので、それ以後も村内の争いや対立として表面化するわけです。例えば学校をどこに建てるか、子供たちの通学が遠くなった地域は反対します。それから役場や公共施設はどこに置くか、あるいはまた新しい事業を始める場合、その地域をどこに選定するか、など。そのたびごとに村中が対立するわけですから、これはこの時期の新しい町や村をどのように運営するかということは大変な問題があったのです。

ようやく日清戦争を境にして、どういう村にたて直すかというのが内務省にとって重要な課題になってきた。それを担当したのがヨーロッパの各国を視察してきて、国の富強の基礎は町や村が豊かで安定していることであると自覚してきた井上友一であったということなんです。だから、模範村としての源村ができたのは言ってみれば日本を近代的な強国としてつくる上において地域社会をどんなものにするかということと関わっています。今までのような江戸時代以来の村落共同体というものだけではもうもたなくなっている。新しい町や村というもののモデルとする原理は何か、今の言葉で言えば町や村のアイデンティティーというものはどうつくり上げるかということなんです。それがこのときの課題であって、そういうものをつくる上で模範村というものにどういう条件が必要かということになる。

その一つとして、この源村が挙げられたわけです。その源村のモデルの柱としては村内に政治的対立がない、党争がないっていう、これが一つ、大きな条件です。

さらに源村が村をあげて取り組んだ事業として、学校基本財産一万九百円を積み立てました。これも最初にある部落の有力者がぽんと千円出したのを契機に村民の皆が基金を出しあって、基本財産をつくったのです。この時期の一万円っていうのは大変なものなんです。このときの源村の一年間の財政収支は千八百円ぐらいです。それに一万九百円が集まったということは、これはやっぱり全国の村々にとっても大変な驚異です。このころの小学校は授業料が要ったんです。だけど、源村は学校基本財産の利子でその授業料も出さなくていい、高等科も授業料を出さなくていいということになったのです。小学校は普

通科四年が義務教育ですけれども、高等科っていうのは限られて人数ですが、その授業料も徴収しない。教員の費用もここから出せるというのです。

つぎの勸業は、これは農事の改良を実行した、農事の改良とは米作では苗代から始まって、できるだけ能率のいい方法で全村的に実行して生産量を増やしたということです。

それから、村の基本財産をつくるということをやったんですね。一万円を目標にして村の基本財産をつくっていきこうという目標をつくってやりだしたということです。

それから、村人がみんな儉約に努めて毎月二十銭以上を必ず貯金する、それは、通帳はすべて役場が持っていて勝手に引き出せない、随分強引なやり方で貯金通帳は役場が管理している。集金は学校の生徒を使って行ったようです。

そういうことをして、源村っていうのは健全な村おこしをなし遂げるわけです。今までもう大変もめにもめていた村が一举に安定した穏やかな村に転換したということが模範村になった条件です。

これは、他の模範村である宮城県生田村などと比較すると大きな差違を発見することができます。生田村はこのころに村の中に生糸工場を持っているんです。それまで村人は養蚕に熱心でなかったのに、村長が養蚕を奨励して、民営の生糸工場を設立しました。林業も盛んで豊かなんです。

それから、静岡県の稲取村はテングサですね。伊豆半島の東側の海面した村ですからテングサが採れるんです。村が指導してテングサを採取し、乾燥から製品の精選、販売まで管理し相当利益を上げたのです。

テングサという特産品を持っていたために、大変豊かになったということとです。

だからこれを財政状態で見てもみますと全然単位が違います。稲取村は年間一万二千元ぐらいの予算です。源村は千八百円、生田村はそれより千円ぐらい多く二千八百円ぐらいです。だから三模範村と言いますが稲取村に比べると源村は予算的にいえばもう七分の一ぐらいで生田村に比べても千円違います。日本の全国の村々はその稲取村や生田村のように、テングサや製糸工場をもたない村が大多数であったと思うんです。そういう状況の中の村のモデルということからすると、やっぱり源村がモデルとして適切であったと言えるかもしれません。

日露戦争前に源村は模範村になりましたが、実はその日露戦争のときに源村は大変なことをやります。源村は日露戦争の五回の軍費の国債募集に合計十万元ぐらい軍事公債に応募したということです。応募というのは必ずしも買ったわけではないが、源村は千八百円ぐらいの年間予算でやっていると十万元もの応募をしたということは、これはやっぱり模範村として大変な無理をしたんじゃないかと思えます。

明治三十九年に内閣書記官の江木翼編『自治之模範』という本が出ています。渡邊弥一郎という人が、源村、生田村、稲取村の三つの村を歩いて記述している。中に源村は非常にいい村だと書いてあるんですが、やっぱり心配があるというのです。それは、村民が協同一致して大変血を絞るようにお金をためて、それでみんな貯金をして豊かになるのはいい。豊かになったときにどうなるのか、気が抜けてしまうのではないかと指摘しています。ここには家庭教育や社会教育が十分されていない

さらに養蚕をやっているけれども、千葉県の中では山武郡は養蚕が盛んなところであるが、源村の養蚕のやり方が幼稚だというんです。もつとできることはいっぱいあるのに努力をしていない、養蚕を実際やっている家も非常に小規模なもので、もう少し規模を大きくすればかなりな成果が上がるのではないかと指摘しています。やっぱりこのときの村の一つの発展の方向として、そういう新しい産業とか企業の発展を目指した村おこしが必要ではないかということを主張していると思います。あの意味では平和で穏やかであるが進取の気風が乏しいともうけとれます。

そこで、源村について後々のことを少し調べてみますと、源村はその後もやっぱりいい環境にあつたらしくて、外から見た観察や感想がいろいろあります。日露戦争後、源村へは全国各地から大勢の視察者が訪れます。その中の一つに、例えば明治四十年代に、清国時代に北中国から視察委員として来た中国人の日記に、源村役場の人たちは親切で村の人々も穏やかであつたと書いています。

また大正三年、当時の内務省衛生局長の中川望がその著書『自治講話優良村巡り』という本の中にも、日向の駅を降りたときに会つた老爺は大変親切で源村のことを誇らしく語つたとの書き出しから、村の現状を詳しく視察し、村長はじめ役場吏員の熱心な取り組みや小学校長や篤志家が尽力してきた経緯を記述しています。そして最後に「源村は別に特記する程の華々しい事業としてはやって居らぬ。只何んとなく平和な空気がゆるやかに全村を掩っている」と感想を記しています。

また、朝鮮から明治四十年代にやっぱりたくさん視察者が来ていますが、それは国策会社として設立された東洋拓殖会社がスポンサーについ

てやって来たということが『山武町史』に書いてありますが、どうしてそうなつたかというところは実は千葉県出身の吉原三郎は日露戦争後に内務次官にまでなつて、その後朝鮮に新設された東洋拓殖会社の副総裁になります。だから、彼がきつと源村を中心にして視察員を送つたのだと思います。源村を模範村に指定した時の吉原三郎と、その後の源村との関わりを付け加えておきます。

最後に、日露戦争中の明治三十八年に「日本帝国ニオケル三模範村」の表題の下に英文で源村を世界に紹介した文章がありますが、その冒頭の部分で「村ハ戸数三百ヲ有スル一小村ニ過ギズ、而モ庶務能ク整理シ事績マタ觀ルベキ多シ」と記されています。その後、源村は、この「庶務能ク整理シ」という評価を村政の中でも堅く守り、役場文書は良く整理され、戦後、東金市と山武町とに合併されるまで大事に保存してきたのです。

模範村としての名誉と誇りが、歴代村長や役場の吏員の人々を太平洋戦争前まで全国から数え切れないほどの視察員を迎えられるに備する村づくりに努めさせるとともに役場文書の整理と保存を實行させてきたといえましょう。その数万点という膨大な量が残されており、戦後の昭和二十九年までの村の実態を系統的に示すこの役場文書は、千葉県のみならず、全国的にも貴重な史料といえましょう。

(うの しゅんいち・本学非常勤講師、千葉大学名誉教授)